昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十二年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二一九号）

# 慈光

第十九巻　第八号

## 目次

近角常音先生御講話……大字三右衛門……(2)
愛と求道……福島政雄……(11)
近角先生著『人生と信仰』2
私の信仰と道徳……和才誠司……(15)
菅瀬芳英師法語抄……聚墨生……(18)
恩師を偲ぶ……岡寛一郎……(23)

八月六日。近角常音先生の十四回目の御忌月を迎え、先生の御晩年、京都での最後の御講話を頂き、皆様と御一緒に御徳音に浴したいと願いここに掲げさせて頂きました。幸に御晩年に御帰郷の節に常随されました大字三右衛門様が、細心の注意の上に一言隻句をも大切に筆写して下さっておりました貴重なノートから頂きました、三右衛門様もすでに亡くなられましたが、謹んで御礼を申上げる次第であります。

更に日下部智様の記録から先生の略年譜も下記に頂きました。

## 近角常音先生略年譜

| 年 | 月 | | |
|---|---|---|---|
| 明治十六年 | 五月 | 一 | 滋賀県東浅井郡湖北町、西源寺に二男として誕生。 |
| 廿四年 | 三月 | 一九 | 東京、京華中学卒業 |
| 廿五年 | 六月 | 二〇 | 兄常観師本郷森川町に求道学舎創立 |
| 廿六年 | 十月 | 二一 | 金沢第四高等学校二年中退。 |
| 大正元年 | 十一月 | 三〇 | 自在丸伊恵子様と結婚。 |
| 大正四年 | 十一月 | 三三 | 常観師、求道会館を建立。 |
| 十五年 | 四月 | 四四 | 現存の求道学舎建立。 |
| 昭和二年 | 一月 | 四五 | 常観師と共に宗教団体法案反対運動 |
| 三年 | 七月 | 四六 | 常観師と東本願寺宗門革新運動。 |
| 六年 | 十一月 | 四九 | 常観師脳溢血発病。 |
| 十三年 | 十月 | 五六 | 常観師長男、文常氏戦死。 |
| 十六年 | 十二月 | 五九 | 常観師七十二才にて示寂。 |
| 二十年 | 二月 | 六三 | 大平洋戦争のため郷里へ疎開。 |
| | 十一月 | | 常観師夫人キソ子様示寂。 |
| 廿一年 | 五月 | 六四 | 求道会館に帰住。 |
| 廿八年 | 一月 | 七一 | 脳軟化症にて臥床。 |
| | 八月 | | 狭心症にて示寂。 |



# 近角常音先生御講話

昭和二十七年四月十八日。（於京都）

大字三右衛門（記）

ア……私は年七十になって身体も段々弱って参るのでありまして、こうして旅を致すのもなか〳〵身体が思うようにならぬのであります。エ……その中をこうして京都まで参ったのでありますが、エ……私の話はいつもと同じ話で別に変った御話もできぬのであります。やはり今日もいつもと同様、歎異抄の最後の章のお話、ア……これをお話申してみたいと思うのであります。

殊にこの結文に就いては、東京に於いては殆んど結文で終ってしまうのでありますが、此処でもおきき取り願おうと思うのであります。初めに読んで、それからお聞き願おうと思います。

「右条々はみなもて信心のことなるよりことおこりそうろうか……」

エ……これは誰も平素読みなれた御文であります。ア……私どういうことか知りませぬが、この御文を話すと皆さんが喜んで下さるのであります。それ故この御文をお話してばかりいるのであります。

ア……私がこの御文をいただくに就いて因縁があるのであります。ア……或る地方へ私が御伺いすると、其処の皆様の御様子を拝見して或る感じを持つのであります。

その地方は兄貴の存命中度々参ってお話を申したのでありましたが、その割合に兄貴の時代に喜んで下された人々の間において以前と違った感じを持つのであります。

エ……私の兄貴の話というのは十年一日の如く「お見捨てない大慈大悲の仏様は有難い」と、こればかりおきき頂いたのである。斯く兄貴の同じ話をきいて下された人々の間にいつの間にやら変になって終うて同じことでも喜ばねばならぬとの風潮が起ってきている。

元来、私の兄貴というものは、信仰と学問をひきつけなかった。然るに今私が思うに、兄貴の一代きいて頂いたこ

と感じが違うのであります。

それにつけても一番先に此の結文のことが頭へ出てくるのであります。妙な話なれど最近頭へでてくることは亡くなられた邦須野一乗師、この那須野さんから、兄貴の存命中でしたが「信仰上から同一信念から人格というか、それが同じようになるのでないか」とのお尋ねをうけたことがあったのであります。

そういう御質問をうけた記憶がありますが「歎異抄の御精神よりして同じ信仰上同じようになっていくのであるまいか」とお答え申したのでありました。那須野さんは非常に喜んで下されたのでありました。其時この結文のことをお話申したのであった。那須野さんは益々喜んで下された。段々この御精神のことをお話申してみたいと思うのであります。

「右条々はみなもて信心のことなるよりこと起りそうらうか」

これは唯円坊が老の涙を揮うて書かれたものである。左様に間違うのは信心のことなるよりこと起り候か、とある通りこれより生じて来るとあります。

歎異抄は前九章と後九章あれど、前九章は信仰上より間違いを正すために仰せられたものである。

「その故は信心のことなるよりこと起り候か。故聖人の御物語りに、『法然上人の御時、御弟子その数おわしける中に、同じ御信心の人もすくなくおわしけるにこそ』親鸞御同明のおん中にして御相論のこと候いけり」

エ……故聖人の御物語り、始終お話に、法然上人の御時、アア法然上人御在世の頃は御弟子方三百幾十人御座ったのに「同じ御信心の人もすくなくおわしけるにこそ、親鸞御同朋の御中にして御相論のこと候いけり」これは吾々子供の時より教えられた御文である。聖人が此時仰せられたことは信仰界の話としては意外のことである。故聖人御物語には法然上人の御在世の時、沢山御弟子のおいでの中に、親鸞聖人が嫌な役を引受けて乗り出しなされた。

「その故は善信の信心も、上人の御信心もひとつなりと仰せ候いければ」

斯うして頂いた御信心は師匠さまのも私のも同一であると仰せられた。是は余程の自信が無いと言えぬことであって、聖人としては思い余った結果、御自らその衝に当られたものであろうと思われるのであります。処が勢観房、念仏房なんどという御弟子方が「もっての外のことである、上人の御信心と同一とはけしからぬ、お前は何をいうのか」と激しい言い方をされたものと思う。

「いかでか上人の御信心に善信房の信心ひとつにはあるべきぞ」



その様に同一でないではないかと仰せ候いければ、とある。

「上人の御智恵才覚ひろくおわしますに一つならんと申さばこそひがごとならめ」

御伝抄にも書かれてある通り、それは上人の御智恵や御才覚と親鸞のが同一となれば誤りならんもそうでない。頂いた信心が同一と申されたのである。これを皆が取損ないをしているのである。私なども何も知らぬが、知らぬながら「どこ〳〵までもお呆れ下さらぬこと一つを頂いてみれば、」誰彼違う筈はないと思わせて頂くのであります。

「ただ一つなりと御返答ありけれども尚いかでかその義あらんという疑難ありければ」

そんな馬鹿なことはないと非難があったのであります。それはそんなことも有りそうなことでア……

「詮ずるところ上人の御前にて自他の是非を定むべきにて」

詮ずるところ上人の御前にてどちらの申すことが正しいか間違うているかを聞いて頂こう、明らかにしようと上人に申上げたのである。其時、法然上人の仰せには

「源空が信心も如来よりたまわりたる信心なり。善信房の御信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり」

是れ法然上人の仰せは全く有難い仰せであります。

「さればただ一つなり。別の信心にておわしまして候わん人は源空が参らんずる浄土へはよも参らせたまい候わじとこそ仰せ云々」

とあって、只一つ若し違う信心なれば源空が参らせて頂くお浄土と違いますと仰せられたのである。

当時に於いてこうしたお話がありました。ここでお言葉が変って聖人と他の御弟子方との争いという、斯うしたお話のあったということは

「一向専修の人々の中にも親鸞の御信心に一つならんおんことも候うらん云々」

同じでなかったことも有ったと見えます。と、是れは唯円房の御言葉である。それ故、

「いずれも〳〵も繰言にて候えども書きつけ候なり」

老の繰言で一向に始まらぬ話ではあるが、斯く書きましたとの仰せである。歎異抄の御精神と申すものは中々大変なことであります。

「露命僅かに枯草の身にかかりて候ほどにこそ相伴わしめ給う人々御不審をも承り聖人の仰せ候いし趣きを申し聞かせ参らせ候えども云々」

露の命が僅かに枯草にとどまる様な恰好で、どうにかこうして息つく間、御縁のあります間は人々の御不審を承り又は聖人の仰せ下された御趣きを申し聞かせられるけれども——歎異抄に仰せられてあることは、よい位の話ではな

い。唯円房がきき耳を立てて如何に真剣に聞いておられたものか、容易にうかがえぬ程深いのであります。

「閉眼の後はさこそしどけなきことどもにて云々」

アア……自分が眼をつむれば聖人の仰せを云いきかすことが出来ぬというまでにお思いになって居られたということは、是れ唯円房が大変な自信のある仰言り方である。自分の外に御真意を言いきかせる者無かろうと思う余り、それゆえ、

「歎き存じ候いて斯くの如きの義ども仰せられあい候人々にも言い迷わされなんどせらるることの候わん時は」

そういう風に陥らんように

「故聖人の御心に相叶いて御用いられ候御聖教共よくよく御覧候うべし」

アア聖人御滅後において御心にかないて御用い遊ばされた御聖教をよくよく拝見すべしとある。アア——色々の事をいうものおこるとも、それにつけて繰り返し繰り返し読まして頂けとの仰せであります。

「おおよそ聖教には真実権仮あいまじわり候なり。権を捨てて実をとり仮をさしおきて真を用いるをこそ聖人の御真意にては候え。かまえてかまえて聖教を見乱らせたまうまじく候」

エ……御文の通りであります。真実とは本当のまこと。これを明らかにするために仮をお説きになった。それであるから紛れぬように実を取れとの仰せ。本当に真実を用いるのが聖人の御本意である。

「かまえて〳〵聖教を見、乱らせまじく候」

間違えてはいけない。エ……大切の証文を後のために抜き書きして斯うして添えて置くとの仰せである。

御承知の如く兄貴一代お聞き頂いた如く、親鸞聖人の直説を唯円房が明らかにした。そういう具合に兄貴は頂いていたのであります。わざ〳〵抜き書きして後の九章を添えられた。そういう具合に出ているのであります。

おかしな話なれど、私は兄貴より親鸞聖人の御本意を聞かせて頂いたのであります。私の安心の力となるものは兄貴の申してくれた一言であります。吾々のような仕様の無い者への一言一言が有難いのであります。一言々々これを繰返し繰返し私もお話申しているのであります。

吾々聖人の御跡をお慕いして行く者は歎異抄の如く唯円房の如くなるのではないかと思うてお話申しているのであります。

私の兄貴のことを話すのはおかしいのですが、又かと思われるでしょうが、何時もお話申すように私へ言うてくれた兄貴の一言、又と思召すかなれど

「彼を子供の時より育ててきて彼に不足は無けれ共、何



時まで経っても〳〵あれの我慢の止まぬが困ったものだ可哀想なものだ」

と兄嫁に申した。

是れ現にそう申したのであるから一言の修正も出来ないこれ言われたままである。我慢止まぬが困ったものだと言うている。これ我慢のやまぬ弟なれば放っておけばよさそうなものであるのに、それを案じてあれが困ったものだ、可哀想なものだと申している。

私はこれを聞かされて、向うの（兄貴）言うてくれた真実が有難かったのであります。

或人が私に後世に残るものを何か書けと言わるる。一般を啓蒙するためでなしに、私の経験を書けと懇望されたのであります。それ故私はこの時兄貴の申してくれた一言を書いてその人に差上げたのであります。

誰だって信心を頂いた最初の間は有難いもの故、有難い有難いと浮かれてしまう。それに夢中になって終うて——私どもその様になっていたのである。自分の頂いたことに浮かれてしまう余りに——浮き〳〵とうかれている者を——その者を憐れむとの御真実——を軽んじていたのである。

教行信証の序文のところに書かれてありますお言葉に

「それおもんみれば信楽を獲得することは如来選択の願心より発起し真心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顕彰す云々。」

この御文のところは先般来東京でもしば〳〵聞いて頂いているのであります。何処も有難いが、この序文は殊に有難いのであります。

大聖の矜哀——悪逆を縁として大悲を開闡して下された。

「末代の道俗自性唯心に沈んで金剛の真信に冥し云々」とあります。

いらぬ話なれど自性とは自分の心と書いてある。おかしな話なれど、兄貴が「我慢が止まぬが可哀想」と私に云うてくれたことは誠に有難かったのであるが、どうしたことか有難い有難いにぼけて終うて、浄土の真証をおとしめていた。有難いとなれば有難い有難いと行き過ぎとなる。是れ性分なれど、どうしようもない性分のものを捨てぬとの御真実、これだけが有難い訳であるのに自性唯心に沈んでしもうて何時の間にやら肝要の本願の御建立の御精神を軽視していたのであります。

半年の後それに気付いて兄貴に持ち出して尋ねたのであります。其時兄貴の申して呉れた一言は

「吾々お慈悲を分からせて貰うても、またやり損ない〳〵それだからお呆れない御真実でないか」

と私に申してくれたのであります。

これ何時もお聞き頂く通りでありまして、こんな小さなことを持出してお話し申すのは皆様どうかと思われるでしようが、唯円坊が聖人より承られた一言一句をおろそかにせられなかった御心持を思出して斯くはお話し申しているのであります。

それ故

「また間違い〳〵それだからお見捨てないお慈悲でないか」

という一言を或人に書いて差上げたのでした。

一旦お慈悲分らせて貰うと誰だとて躍り上る程に喜ぶのである。然しながら、それで有難い〳〵とやっているうち、そう何時までも〳〵有難ずくめで喜ばせて頂くことの出来ぬ吾々である。こういうことではどういうものかと又変になる。それ故、それだからお見捨てのないお慈悲と申すものは、このこと、他力のお言葉としては大変なお言葉なのであります。ここの処皆さん分りましようか。斯く浄土の真証をおとしめているのは誰でもない私がおとしめていたのである。これを思うて申しているのであります。

それ故、ここ兄貴の言うてくれたまま、私へ言うてくれた言葉そのままを申しているのである。

「一旦分ったと思うてもまた間違い〳〵それだからお見捨てないのでないか」——私はこれを聞かされてからは、その後どのように此方が間違うても、間違いを取り消そうとは致しません。如何に間違うとも、心得損ないをして変になるとも、その者をどこどこまでも憐れに思召し御あきれ下さらぬお慈悲を承った上は、此方の間違間違わぬでなしに、それをお見捨てない向うさまの思召しが有難いのであり、それだけが吾々の力とさせて頂くところなのである。それ故、爾来私はここ如何なる時もびり動き致しませぬ。何時も有難くたのもしく思わせて頂いているのであります。

ぼつぼつの申しかたをして相済まぬのですが、もう少し歎異抄をお話してみます。

「権を捨て実をとり仮をさしおきて真を用いるをこそ聖人の御本意にては候え」

吾々は何時も思い損いをするのです。即ち真仮を此方で見究めねばならぬと思うている。何、それが此方で分る位なれば仏の御苦労は要らぬことである。それが分らぬ故、分らぬぶんの者故捨てぬとの仰せなのであります。

ここは大切なところであります。

「聖人の常の仰せには弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」

聖人日常繰返し〳〵の仰せであったのであります。

真のおまこと——聖人は善きにつけ悪しきにつけて、五



劫思惟の願と仰せであります。くど〳〵申して相すまぬのでありますが

「真を用いるこそ聖人の御本意にては候へ。かまえて〳〵聖教を見乱らせたまうまじく候。大切の証文ども少々ぬき出し参らせ候うてめやすにして此書に添えまいらせそうろうなり」　次に

「聖人の常の仰せには」とおっしやって「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ云々」

と。私は十二、三才の頃に兄貴と道を歩きつつ教えられたのであったが、

「この御文有難い御文だがお前分かるか」

と兄貴が申したことがあった。一般に斯う頂くと有難い、いやどうだこうだと云うのであるが、聖人はひとえに私一人がためなりけりとの仰せであります。思召したちける本願のかたじけなさよ、との仰せである。

何時もお話申上げる通り私も長年信仰のことが分からなかったのです。この自分のことを思出して申しているのであります。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」

ここで今日申上げたいと思いますことは、或長年真宗のお話を聞いた人があった。西本願寺の信者であった。

この方一代の間に大成功された人であったが、晩年になって胃癌となり東大病院へ入院されたが、病気危篤の状態になられた。平素より仏さまをよろこんでおいでになったが、愈々病重くなるにつけ喜びも消えて非常に心淋しくなられたのであります。どうしても安心が出来ぬ。私の処へ使いの方が見えて是非出掛けて来て話して欲しいとのお頼みであった。

私は坊主故、ききたいと乞われればお話申し上げねばならぬのだが、臨終近い病人にお話申すのは話す私の方がつらいので中々うまく聞取って頂けぬのであります。

行かねばならぬので出掛けてお話を申上げたのであるが病人の方も苦しい中であるから中々分って頂けない。種々と申上げた末、終りに思いついてお話申したのである。

「仏さまの広大なお慈悲というものは、あなたを捨てぬとの仰せである。その仏様のおことずけをあなたに伝えよと言われて私はその伝言を持って参ったのである」

と。真宗の信仰というものは仏さまの伝言を聞かせて頂くのだと思うのであります。

「貴方が聞く聞かぬは別、私は仏さまからの伝言だけ申

して行きます。仏様は仕様のないものを捨てぬと仰せである。このことを伝えよとのことである。私は伝えるだけの役目で、それをあなたが聞こうが聞かれまいが、私にその責任はない。伝言だけ置いて行きます。」

と申上げた。

それを申すとその人始めて「仏さまよりの伝言ですか」と申された。この方にはおつらい中をそれ以上お話申しようもなく帰りましたが、御本人この話をきかれて、大変喜ばれたということでありました。

私は学舎でもこの話をいたしますと、簡単な言葉故皆さんはよろこんでおきき下さるのであります。言葉は簡単なれども、その底の意味は深いのであります。爆薬の如き意味があります。

「もつとお聞き頂きたいのでありますけれども、この調子でお話申していると堅い筋道だけの話となるのであります。それ故皆様にお尋ね頂いてお話を進めさせて頂こうと思うのであります。」

私、頭がもうろくして長いお話も続かぬのであります。どうか御遠慮なしお尋ね下さい。お尋ね頂いてそれに対してお答えを申そうと思います。それではこれにて……。

**(追記)** この後先生を囲んで出席の皆さんの間に色々とお話がありますが、このところでは省略いたします。後日追記させて頂く機会もあろうかと思います。〔三右衛門〕

## 信の生活

誉田豊吉

聞くたびごとに初事(はつごと)、聞くたびごとに不思議。又同じことか、そんなことは従前から知って居ったなぞ思うは未だ信を得ない証である。唯理解的に信をもてあそびたしるしである。

いつ聞いてもありがたい、いつ聞いても慚愧に堪えないようになくてはならぬ。仏の無限のお慈悲を感ずれば、実に我が心の汚れているを知り、ますます恩徳を感謝するのである。

もう遠の昔に助かって居る。解って居るなど横着な考えはとても云えぬのである。

私は仏のお慈悲によって救われた、故に我は他に対して仏の如き清き愛を注がねばならぬと思うことがある。これは大なる矯慢である已が仏の位に上りて人を見下した態度である。我はいつも罪悪無力の凡夫である。仏のお慈悲にて救われ、楽しく日暮らしするようになしてもらったものであれば、このお慈悲を、人にも知らせ、この喜びを他人にも伝えようと思って、万事取り行わば仏の力で、おのずから他の人も感ずる。決して我が力を当てにすべきではない。

(信仰静観録より抄出)



# 法信抄

東京都　西興子

(編者註) 近角常音先生の伊恵子奥様は数年前から脳血栓症でずつと御療養を長くお続けになつておられますが御息女の西興子様からお近況をお知らせ頂きました。摂取の光明下の御生活ありがたく拝しました。奥様が御健在の頃に頂きましたはがきの一文に「主人がよくこの世におもしろいこと、希望のある人なら、お慈悲はいらぬ何もかもくらやみだからお慈悲がありがたい、と申しました」との一句、忘れ得ぬものの一つ、ここに誌します

……なかなかお暑い毎日ながら本郷の母も意外に元気に過しております。病気も今ではすつかり落ちつき、血圧も安定、お食事もおいしく夜も安眠出来、頭の方も回復し、私共よりしつかりしていることを申しびつくりする折もございます。手足の後遺症は致し方ございませんが、毎日附添に助けられて学舎の廻りを一巡して草花の成長を四季折々楽しむことも出来ます。ほんとによくここまで治つたものと御仏の御加護を今更思わずにはおられません。

それでも母にすれば煩悩もだし難く御仏の御ふところで駄々をこねている母の様子をみておりますと、同時に私達の姿と気がつきます。うつろに空しく年を重ねて終つてしまうべき私共に、父はこの有難いともしびを遺していつて下さつたことをしみじみ感謝しております。

あんなにも私共を気遣い、それ故に何よりも力強い命の綱を、絶対のお慈悲をのこしていつて下さつたのだと、これこそ慈悲の遺産だと存ぜずにはおられません。子供もぼつぼつ成長した今、私共もこの父よりの遺産をかわいい子供達に伝えたいと念じております。

間もなく命日がまいりますが、父の日記、父の講話をひもとく朝にはじまる毎日でございますので、父との対話の中にくらしているようなこの頃でございます。毎日が命日のように自分では思えます。

何か事あるごとに「お慈悲一つでまあやらせていただこう」という以外に考えようも、言いようもなかつた父の生活、その意味をわずかながらもわからせていただいて、おぼつかないながら日暮しいたしております。母もお慈悲の力で一日一日ひつぱつていただいているような感じでございます。どうぞ御安心下さいませ。……かしこ。

# 愛書と求道

近角常観著「人生と信仰」②

福島政雄

「倫理力行と信仰」という題の下に、近角師は、先ず重盛が忠孝両全という高い理想のために苦しんで、終に死を熊野に祈るに至ったことを述べ、若し彼が胸中一たび信仰の光を点じて、その安立すべき地盤を見出したならば何もこの人生をすてて死を祈る必要はあるまい。その境遇に入ってしかも十分に信ずるところに立って為すべきことを為したであろう。しかるに忠孝の間に煩悶して終ったのは、未だ安心の立場を見出さなかったからであると述べられている。

倫理というものは、いよいよこれを力行せんとする場合になると、思うように行えぬものである。孝行一つ考えても十分全くよくすることは出来ぬ。親に学問させて貰うからは、どうか成業の後十分の孝行をしたいと思っても、前途なお遠くして、まだ成業に至らぬ間に親は死ぬかも知れぬ。家庭の中について見ても、本来は家庭の円満が理想であるが、実際多くの場合はそれが行われていない。嫁は真に従順に夫につかえ、姑は嫁を可愛がること子の如くあろうとし、双方がつとめつとめているだけ、それだけ内心が苦しくて、とても中心に安んじて行うことが出来ず、ツイ力行のため倒れてしまう。外観の美しいだけ内心は理想どうりにいっていないのである。それで師は次のように述べられる。

若し倫理力行に安んじて実行が出来るというものあらば其の人の理想が低いのである。若し高き理想を有して真面目に極端に実行して行つたならば、終にはつまりてしまわねばならぬ。実行主義は教えとしては高尚であるが真に人に安立の地盤を与えることは出来ぬ。この問題をもっと深く考えると世間的より宗教に入る。



このように述べられるが、しかし宗教と言つても廃悪修善の宗教、たとえば仏教で普通に教える諸仏の教えというのは、諸の悪は作(な)すこと莫(なか)れ、衆(おおく)の善を奉行(ぶぎょう)せよ、自ら其の意を浄からしむるは、これ諸仏の教なりと言つて、汚れた心を浄からしめ、行を正しからしめよと言うのであり、戒律がこれに伴うのであるから、これを行うことは決して容易ではない。それで結局はどうなるかについて、次のように述べられている。

千万力尽きて最後は如何になるかというに、ここに至つてはじめて気附くのが絶対の仏陀慈愛の光である。忠孝も出来ねば、人道も博愛も行い得ぬ人間、理想を行う力なき人間、自分の立場を失った人間、此の如き悪人、此の如き弱きもの、此の如く苦しめるものに向つて、慈悲を注いで下さるは仏陀である。一たびこの仏陀に気附くときは信ぜざらんとするも信ぜずには居られぬ。唯々仏陀の恵みの深きことに感泣する。これが絶対他力の信仰である。一たび仏陀の慈悲に触れ来りてふりかえりて見るとき、かって捨てたる倫理も博愛も戒律も皆生きかえる。

信仰と倫理戒律との関係は微妙である。その関係を師は次のように述べていられる。戒律に言われている中には、倫理道徳のことが意味せられているのである。

真実なる信仰には必ず真実なる戒律が之に伴わない。真実の戒律は必ず真実の信仰から来るものである。けれども戒律は兎角形式に流れ易いもので、若し戒律が信仰の生命を失なつて徒らに化石して、その形骸ばかりを残すことになると、その時は必ず生きた信仰をもって、一撃の下にこれを打ち破らねば到底真正の宗教の生命が出て来ない。それであるから古来律法があまりに複雑を極めたら後には、必ず直截簡明なる信仰をもって根本的にこれを破ることになっている。

親鸞聖人の宗教は正にその直截簡明なる信仰であると言つて居られる。念仏というも信仰の源泉から流れ出たものと言って、その源の信仰が大切であると際立てて信仰をすすめられた。その信仰は自分のような虚仮(こけ)不実の悪凡夫は、ただ仏陀の真実至誠によって救われるのであるという純一簡易の信仰である。この信仰に徹した上は道徳や戒律が生きて来ると言って、次のように述べられている。

自分の家庭に向うても、理想が旧いの新しいのということでなしに、ただ自分はあさましいものであると思うところから、妻に対し子に対して行つているばかりであるが、他から見れば頗る感ずべき行である。

対手の人の手元を見るのでもなく、世間の人の思わくを気にかけるでもなく、一心にただ仏陀の示し給うところを服膺（ふくよう）して更に余念がない。信仰の上の行為は少しも力味心でやるでなく、眷々（けんけん）と仏勅を奉戴して行うばかりである。此の如く一たび形式の戒律を打破ってあらわれた信仰は、再び生ける戒律を生じ来るものである。

倫理力行の問題をこのように解決して、次には犯罪心理と信仰という問題について述べられている。人間の犯罪の根本は欲念であるといい、釈尊が三迦葉（さんかしよう）という三人の事火外道（じかげどう）に対して説法せられた有名な火の説法というのは、目も口も五官ことごとく欲の火をもって燃えていると説かれたのである。人間は欲念のため苦しみ、富を求めるのも成功を急ぐのも、名誉を求めるのも、ことごとく欲念であり、欲が思うように遂げられなければ犯罪に至る。

犯罪の心理はなかなか普通では想像が出来ない。しかし信仰の話を常に聞いている人は、無意識にでも善悪の因果の理（ことわり）を信じているから、そうゆう邪路におちいらぬ。この点は実に喜ぶべきことである。因果を知らぬ者は、自己に属せぬものでも、これを或る方法によって自己の所有物として成り立ち得られると考えている。そういうものは信仰の眼から見れば甚だ憐むべきものである。しかし人間は犯罪におちいり易い性質を持っている。

人道を行おうとするに就いても、こちらは真面目に人道に従って行うていても、他の者がなかなか人道を重んじない。正義を厳重に行おうとしても、他の者がそれほど正義を重んじない。博愛の道に出でようとしても、これまた容易に行われない。そこで頗る不足に思うことがいよいよ甚しくなって、如何にしても満足が出来ぬ。それがために如何なる行為に出でるかを計りがたい。此のように人生上の現象を一一考えて来れば、最後の断案はすべての人間は犯罪におちいるべき心の状態を備えているものである。

殊に犯罪上にありて著しきことは、犯罪者自身が利己的のものと思うて居らぬ点である。自分は他人に対してはかくまで尽している。ゆずれるだけ譲って居る、為すべきだけのことは十分に為して居るのに、世人はそれを理



解してくれぬ。眼のあかぬにも程がある。よしそれならば一つ思いきりひどいことをしてやろうと、他の方面に積極的に破裂して行くことが往々ある。

世の中に慈善の為とか、人道の為とか、宗教の為に働いていると言っても、実は成功を目的として居るのであるならば、一寸した行きちがいから、知らず知らず遂に犯罪的行為に出る。宗教の事すら此の通りであるから、政治上についてはなお更である。国事犯も行われる、暗殺もあえてする。その外種々無量の犯罪行為におちいる。要するに政治上は勿論、名は宗教でも真の信仰よりするのでないならば、美しき名の下に多くの犯罪が行われる。

このように人間の犯罪のことを述べて、さてその救済のことは、ただの仏のお恵み一つであると述べられる。信仰の最後の帰結は、人生百般のものが眼中になくなって、ただ仏のおめぐみ一つがしみじみと感ぜられたのが真の信仰であると述べられる。心が外に向っている間に信仰は起らぬ人生は成功も名誉も唯仏の慈悲ばかりとなって、信仰の光があらわれて来ると言われ、犯罪心が転じて信仰の境地が開ける微妙の趣を次のように述べていられる。

自分は罪ある悪い者であるという考えが起って来ずに自分は大いに成功が出来る、善く行けるというつもりでいる間は、親は無慈悲である。自分の求むるものを与えられないと恨むとか、また色々のものを与えれば、それが親のあたり前であると思うているとか、少しでも善いことがあれば、皆自分の手柄の如く思うて居る間は、親の前に身を置きながら、親ということに気附かずに居る如く、小さい人間が仏のお恵みの中にありて、自分がやって行くという考えの間は、仏の慈悲に気が附かぬ。仏の恩恵に気附かずに、ただ自分の計らいでやって行けると思うから犯罪にまでなるのである。

仏の恵みは実に広大である。今まで粗忽に思うておったのは実にすまぬと一点仏の恵みを感じて見れば、自分の今までの親に対し人に対し為し来ったことは皆まちがっている。実に今までは悪かったと眼が醒めて、大に懺悔心が起って来る。また自分の予期せざるところに仏のお恵みがあらわれて疑うことが出来ぬことになる。

この境地が開けて問題は解決するのである。

〈人間と真理、十三巻五号〉

# 私の信仰と道徳

和才誠司

## 一、信仰と道徳との区別

信仰と道徳を論ずることは、なかなかの大問題であるから、私にはこれを語る資格はないが、浄土真宗を信ずる私が、真理と方便とを混同していたから、この点を明らかにしたいと思う。

信仰は阿弥陀仏と私との関係である。即ち生死善悪の問題を私の力にて解決できず、阿弥陀仏の慈悲に依り解決して頂くのが他力の信仰である。

浄土真宗に信俗二諦の教があり、善をすすめ、悪を戒しめているが、これは救済の条件ではない。信者のたしなみとして、報恩感謝の至情から自然に湧き出ずる産物で、一般の道徳とちがう。

道徳は人間の相互関係を律するものである、故に絶対者につながる信仰より湧き出る俗諦の教とは自然に異る。

元来宗教は、人間が如何に生くべきか、人生の根本の教で道徳以前のものである。然るに今日、宗派により、或は民間信仰においてこれを同一に取扱っているものがあるのは信仰の相違より来るものであろう。

## 二、信仰は眞実、道徳は方便

敗戦後、特に私の心を強く感動させたのは、教育勅語、軍人勅諭に対する日本国民の考えが変ったことである。

人は永遠の真理を求めて努力している。勅語に

『斯ノ道ハ実に我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スベキ所、之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ』

と示されてある。私は幼い時から家庭に於いて、学校に於いて、又社会に出て教育者として、軍人として、此の如く培われ、これこそ日本国民の守るべき永遠の真理であると、堅く信じていた。

然るに敗戦後、これに就き国民の考えが違って来た。戦争に勝敗はつきものである。一度敗れたからとて、この真理がくつがえることはあり得ない。真理は永遠の不変不滅



である。戦後民心の動揺に乗じ。マッカーサーの占領政策が功を奏しているが、今に見ろ、日本精神が必ず復活するぞと大いに期待した。

日光が一時雲霧に覆われても、再び輝く如く、真理が一時狂げられても、必ず復活すると期待した。しかしこの期待は、戦後二十余年後の今日、すこしも復活しないのみならず、却って悪い方向に進み、国民の思想は益々混乱している。日本の現状を卒直に云えば、日本の国体は、君主国か、民主国か、或は共和国か、はっきりしていない。日本の国土も、沖縄、小笠原、竹島、北方の島など問題があって、領土が明確でない。又日本国に軍隊ありや否やの問題に就いても、国民の議論が岐かれ、訴訟しても司法責任者が明確な見解を発表することが出来ぬ。実になげかわしい国状である。

我が国は戦争後、自由と平等の二本柱で国を建て直さんとしているが、元来自由と平等とは、互いに相容れざるもの、両立し得ざるものである。自由を推し進めて行けば平等が犯され、平等を強調すれば自由がおびやかされる。故にこの二本の柱を協調融和させるため、更に一本の柱が必要である。これなきため、いつまでも国論がまとまらぬ。

米国では南北戦争後、リンカーンが自由と平等と博愛の三本の柱を建てたから、人種を異にする多種多様の国民が団結することが出来、今日の如き隆盛なるアメリカ合衆国の基礎をきずいた。

器械の運転に潤滑油が必要な如く、人間が社会生活をいとなむ限り、人間相互間に道徳が必要であるから、我が国にては明治政府が、教育勅語に依り、国民を教育指導したのは適切な政策であった。これが為日本国は繁栄した。

道徳は人間に欠くべからざる必枢のものであるが、人間の作ったものである。人間の作ったものは、権であり、仮であり、情勢に応じ移り変って行き、遂には必ず消滅する人間はあてにならぬ。

故に道徳は方便であると断定する。

此の世の中に動かぬもの、不滅のものは、仏の説き給う法のみである。

一如、真実の世界から、私の根本的願い(死にたくない、苦しみたくない)を満足せしめるためあらわれたまう如来、私に無量寿、無量光を興え給う如来のみが真実である。

正信偈に説かれてある

如来所以興出世　仏が世に出られたのは
唯説弥陀本願海　唯弥陀の誓いを説かんがためである。
五濁悪時群生海　五濁の世にある人々は
応信如来如実言　如来のまことのみ法を聞くがよい。

の教こそが、三世を貫く永遠の真実である。聖徳太子の常の仰せの「世間虚仮、唯仏是真」で、人生にあてになるものは、唯仏のみである。

### 三、道徳を守り得ぬ私

死にたくないが、死なねばならぬのが、私である。

善いことをしたいが、善いことの出来ぬのが、私である。

悪いことを止めたいが止められぬのが、私である。

言行一致とか、知行合一とかいう教があり、まさにその通りで、努力しているが、その通りになれぬのが私である。

冬は寒いにきまっている、愚かな私の頭脳にも認識しているが、さて極寒の季節となり身体が冷えてくると、寒いと愚痴をこぼさずに居られないのが、私である。

正しい要求と貪欲との間には区別がある筈であるが、その限界を越え、貪欲をむさぼらずには居られないのが、この私である。

私の日常生活はこのように、私の心が私の云うことをきかぬ。私自身道理はわかっているが、道理が身につかず、邪道から逃げられぬ宿業を背負い、お話にならぬ愚かな、あさましい生活を毎日繰り返している。実に私は道徳を守り得ぬ失格者である。私には善悪を越えたものでなければ、私の人生は解決出来ぬ。

この如何とも為し得ない、切羽つまつた私には、この私の欠点をことごとく承知し、飽くまで同情し、飽くまで見捨てず、どこどこまでも救済し給う、阿弥陀仏のお慈悲を仰ぐ外に、私のたどるべき道は全く無い。

煩悩具足、無力無能の私が、阿弥陀仏の絶対の慈悲に生かされ、一切の罪障がおさめとられ、仏陀照護の下に、慚愧と感謝で、荊棘（いばら）の道を堂々と濶歩させられ、本当にありがたく勿体ないことである。

### ゲーテの言葉

○ 芸術でも科学でも、または挙止動作の上でも、すべて要はここにある、即ち対象を明かに理解して、その性質に相応した取扱い方をすること。

○ 人は他人の口を止めることも防ぐことも出来ない。ただ他人が云うままに云わしておいて、自分でやるだけのことをするより外はない。そうすれば仕舞には口の方が負けるものだ。

◉

◉



# 菅瀬芳英師法語抄

聚墨生

### 興津の眞楽寺

私はかって東海道興津の真楽寺という寺へ参ったことがある。ここは開山聖人が相模化導の旧跡である。私ははじめてここを訪れた時「何だ、こんな寺であるか、少しも掃除がせられてない」と歎いたことであった。

その後、京都の本山に参詣し、堂々たる大伽藍を仰ぎ見た時に、そこにはとても宗祖聖人の御旧跡を偲ぶことが出来なかった。それよりか汚い小さい真楽寺の方が、草鞋竹杖の聖人を回想するに適当であることを痛感したのである。昔から「信は荘厳より起る」と申すけれど、粗末な汚い所でもかえって有難味があるものである。

### 眞宗行者の特長

真宗行者はその聴聞振りや報謝振りが、自分に不足を感ぜられるというようでなくてはならぬ。いくら聞いてもまだ足りないと感じ、いくら報じても報じ足りないと感ずるのが当然である。

何故かと云うに、根気が続きかねるというは劣った人間であり、如来の大悲は無限不可思議であるから、聴いても報じても不足勝となる。これが当流の他宗と違うところである。

### 超凡よりも平凡

平凡ということは実にありがたい。例えば我々は米を常食としている。米は一年中食べて居って特にこれという味がない。至って平凡である。これに反して魚や肉というものは、好きな人はうまいうまいといって舌鼓を打つ。然し我々の好む魚や肉も、これを毎日三度食べるとすればどうであろう、きっと飽きるにきまっている。

かりに今、魚や肉のうまさを超凡というておこう。いま我々東洋人が何故米を主とし魚肉を伴とするかといえば、これは平凡というものが永久的で、超凡は一時的であることを語っている。恐らく西洋人と雖も肉食ばかりで生活しにくいであろう、彼等はパンを常食とするからである。

それ故、平凡は超凡より勝っていることが知れよう。実に平凡はよい。当流の教義は平凡で、いくら報じてもしるしがないのが尊いのである。平凡であるから有難いのである。古言にも「しるしなきこそしるしなりけり」とある。

### お呼声を便りに

近頃の者はどうも信心を得てから、その結果として有難い心持を望んでやまない。信心の上は必ず我が心に或る感情を得たいとする。それは自分が造ろうとするのであるから永遠性がない。

当流はそうではない。あなたのお呼声を便りにするのである。それ故当流では「聞」を第一とする。「其の名号を聞いて唯仏語を信ず」とはこれである。

かくの如く如来の勅命を便りとするのであるから、お呼声の外に別に我から有難い心持を得たいと思うに及ばぬのである。有難い、有難くないなどの感じのために如来の慈悲に変りがあるのでない。唯如来は、迷っている私達を捨ておけずして大悲を起したもうたのである、行者の感情は一時的で、如来のお勅命は永久的である。

### 義なきを義とす

信仰を語るにはすこしも飾るを要しない。「思いうちにあれば、色外に現わる」という風でなければならぬ。それ故に心のままを告白するがよい。またお聖教の中には「義なきを義とす」とか「我心のはからいなきを他力という」とのお言葉がある。唯赤裸々に言葉を飾らずに述べるがよい。

### 如来の御仕事の邪魔をせぬがよい

誰に限らず年を取ると、未来の責任を感ずるものである。責任を感ずるとせば、我々は未来をどうすればよいのであろう。我が力で解決が出来るか、否、我には力が足りない。自分で責任を完うする見込が立たない。それでは誰か我に代って責任を果たしてくださる方があるか？

三世十方の諸仏の中で、我々の未来を問題に力瘤を入れて下さるのは、唯阿弥陀仏お一仏である。それゆえに、如来の仰せ通りにすればよい。如来の御仕事の邪魔をせぬがよろしい。

これが即ち「義なきを義とす」のいわれである。他の語で言えば唯信仏語である。「親鸞におきては……信ずるほかに別の子細なきなり」ただあなたの広大なるお慈悲にまかすのである。これを一茶は「ともかくもあなたまかせの年の暮」というた。

### 病床談片

病人と共同生活（東大病院に上皮癌で入院）をしておれば真の平等の大悲も思わせられて有難いことである。一人が一室を専用してがんばっておる声聞地の自己満足よりは病友と共に苦しみもし、遊びもし、喜びもするのがありがたい。真の菩薩の行というのもかようであろうかと思われる。和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は利物の終り、とある妙味を幾分たりとも味わわせていただくことは真に大きな獲物である。

○

壮健な人も死ぬ、病人も死ぬ、常陸山も死ぬ、大山公も死ぬ、この世の人は〆（しめ）て皆死ぬ。けれども本願に乗托した者は前念命終、後念即生、即得不退と毎日生き生きして大々的往生、真に永遠の生命を得るのである。生、老、病、死は仮相であって真実相に非ず、世間虚仮、唯仏是真とは天寿国マンダラの言なり。「行って見ても行って見ても旅なれば一寸ここらで死んで見ようか」とやった人もあるが、その様に死を急ぐにも及ばない。縁が失せれば死を現じ、縁あればもう少し業をさらすもよかろうな……。

○

以前の家内に子供ができてどうにもならぬときは育児院にやれ、病気になったら慈善病院、老人になったら養老院に行ったらよい、宗教的にはいつでも背水の陣じや……

世間の事についてかれこれ言うた時は相手にしなかった……とうとう信仰に入って芽出度往生を遂げた。

○

今ラヂユムをくわえている。

（註。その頃ラヂユムの棒は東京帝大病院と其の他一二にしかない法外の高価なものだときいていた。それが一度紛失して大騒ぎのあったことがある。看護婦の粗忽で綿と一緒に屑籠にほうりこまれていたという悲喜劇であった。菅瀬先生は「過分の療治をして貰うので一寸魔がさしたのであろう」といつて看護婦に大層同情しておいでになつた。これがもとで、その看護婦にもだんだん御法話をなされたようである）

羅什（らじゅう）三蔵と余程因が篤いと見える。
羅什夢、羅什夢と暮れにけり。
勿体なや乗彼願（上皮癌）で到彼岸。

という具合に行かれぬ、業がまだ残っている。

○

ある婦人が仏法の話をしてくれというて来たが、今日は忙しいからといって、また来なさいと断った。それからしばらくたっとまた来た。今度も断った。一ケ月目にまた来た、その時も断った。それからだんだん度重なって、しげしげ通い熱心に求めた、それでは今日はいよいよ仏法の話をしようといって、

「仏法とは油断をするなということである」

と。その一言にたちどころに道に入り、仏法を真剣に聴聞するようになった。

○

この病室はいつでも正月、日日是好日（ひびにこれこうじつ）三千世界の春はこの一室に集る。

○

健康な人、御見舞申候。御用心御用心、仏法は油断にてしそんずるぞ。

○

強頑（きょうがん）の坊主も癌で願往生、我が身ながらも芽出度かりけり。

歳々（としどし）の春より嬉し今日の春。

待ちたまう弥陀の浄土に今日もまた。

我が春は暮の晦（みそか）のその日まで。

我が室の春は常住不変なり。

初夢は羅什（らじゆう）の世話になりにけり。

○

強頑
強癌
強願
メて南無阿弥陀仏

○

寒の入りが六日、この頃から親鸞聖人の御病がつのったらしい。十六日御往生……正月を迎えるよりは、御正忌の近づくのが自分にとって重大事件……世間なみの正月とはちがって、精神的に一年中の罪悪を懺悔して新しい生活に入るのは御正忌である。二度正月があるのじゃ。

○

病気になってからわざわざ見舞に来てくれるやら、各地から親切な手紙をいただくやらするのでありがたく思うているが、自分は病苦にせまられて生、老、病、死のことがしみじみと感じられ、平生業成なればすでに大悲光益の身とならせて貰っておるから油断なく称名を相続しておる次第である。

それにつけても皆さんが油断どもにてはなきかと、それのみ案じられてならぬ。そういうわけで御見舞の御礼のつもりで、口でも手紙でも、御文章や御一代聞書で蓮如上人が、皆々の油断をおいましめ下さった御言葉を述べて、こちらからも健康なる御人（ごじん）いかがと御見舞申し上げているのである。

○

病気は過去の業因である。救済は仏の本願である。業因のあらわれと、如来のお慈悲とが、はっきりと区別が立つて、いよいよお慈悲がありがたい。

○

病気にかかるということは確かに不徳のことである。自分が病気のために幾百人の人々に御心配をかけることはまことにすまない。なかには夜も眠らないで、私の身の上を



案じて下さる方があるそうだが、誠に勿体ないことであるわずらうと云うことはたしかに不徳である。

○

私が癌になって入院して以来、気の毒じやと云って毎日沢山の人が見舞って下さるが、実は私よりも気の毒な方が沢山にある。不治の難病にかかった私が死ぬるのはあたりまえだが、患っている私ばかりが死ぬる様に思っていると大間違いである。私はそういう人が気の毒でならない。後生の一大事は油断から仕損（しそん）ずると蓮師も仰せられてある。油断大敵じや、油断大敵じや、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

○

参りがけの駄賃（だちん）に御報謝をさしていただくのが何よりうれしい。

○

今日の春、諸仏菩薩ともろともに。

○

先生が大学病院に入院のとき、さる会社に勤めて相当の地位にある同和学園出身の某氏が、先生の見舞に来て、

「先生春になりましたら、自動車でお迎えに来ますから花見に参りましょう」

と慰め顔にいうと、先生は病床よりむくむくと起き上り、某氏を見つめ、ややしばらくして

「お前はこの世の花は見られようが、お浄土の花は見られんぞ。お前がよし百万の財産家になっても、一遍のお念仏が唱えられないようでは大の親不孝者となるのじやぞ！」

と叱るが如く言い終って、もとの如くに横臥された。先生は自分が不治の難症にかかられていることも忘れて、人の身の上を心配せられることおおむねこのようであった。

## 常持語

円乗院　宣明師

道を歩いていると毒草があるが、その近くには必ず薬草がある。食べて毒になる草のある所、必ずそれを消すだけの薬草がある。

凡夫のあるところ、必ず仏様がござる。仏様がござって凡夫があるのではない。凡夫のあるところかならず仏様がござる。

# 恩師を偲ぶ

岡寛一郎

六月号慈光誌に、菅瀬芳英師の法話抄を拝読いたし在りし日の師を偲び感慨無量でした。私方と菅瀬家との関係は私の祖母の姉の縁家先に、松山市から三里ほど離れた砥部（とべ）町に日野という庄屋がありその家の娘てる子氏と云うのが私の祖母の妹永木ワカという人の世話で菅瀬師の後入りとして菅瀬夫人となられ、長男大芳氏（戦病死）二男十朗氏（三菱油株式会社業務部勤務）の二人の子供を同和学園で育てられましたが、すでに故人となられました。

はじめて永木ワカ女史から菅瀬師に縁談を申し込まれた時、師は日野家ということに、聖人のゆかりの名のために大変心が動かされたという事と聞いております。

私が師を知ったのは、私が小学校五年頃と思いますが、はじめて松山へ来られて拙宅を訪問されました時、恰度祖母と母とが説教を聞きに行った留守であったので、父に、ああえええとこころへ行きましたなあ、と大変よろこばれました。それから松山の刑務所に行かれ、親しい人（囚人）に会って来たといって再びおいでになりました。かねてから母から聞かされておった東京の偉いお坊さんにはじめてお目にかかり、例の長い鬚を生やされ一寸見ると恐ろしいはずなのに、何となく親しさを感じ、母と共に砥部町までついて行き、家族の人等にお話をされました。その晩は、坊や一緒に寝ようといわれ、人一倍はずかしがり屋の私が不思議にも喜んで同じ床に這入りました。その時すでに口頭を痛めて（癌の初期）おられたのか、ヒイヒイ、ゴウゴウと云う呼吸の間に間に、ナンマンダーナンマンダーと目が覚めるといつもその声が聞こえました。それがまた不思議にも子守唄のように感じました。

朝になって師は、坊やはもうすぐ東京の学校へはいるだろうから、東京へ来たらうちにおいで、と云われたことを覚えております。



私が上京して同和学園に入園した時は大正十年で、すでに師は極楽往生されて五年位と思います。

上京する時、永木ワカ氏が、東京へ行けば近角先生のお話を聞くようにと勧められ、当時私が人生問題で悩んで居った時で、はじめて学校からの帰り九段の説教所で先生の御体験談を聞かされた時、私の心に思っておることをえぐり出されておるような気がしてぐんぐん引きつけられ、毎週土曜日の午后二時を待ちかねる思いでした。或日、講話が終り電車で小石川に帰る車中で涙が出てとまらないことがありました。その後求道会館へ大正十三年頃まで通い続けました。

同和学園で菅瀬師の何回忌かの時、左記の方々をお迎えして法要が営まれました。前田慧雲博士、島地大等師、泉道雄師、近角常観師をお迎えし、園主であった北村教厳師の導師で法要を厳修し、最後にどなたか御法話をということで皆様ゆずり合って居られましたが、近角先生が、それではと、菅瀬師の前御夫人のことを話され、よく求道会館に来られた方で、篤信者であった思出を話されました。

当時の園生は、青原慶哉氏、菅原得道氏、平等通昭氏、高橋盛孝氏（現関大教授文博）西本清三氏等でありました。

島地大等師が現西本願寺法主大谷光照師を時々同和学園にお伴して来られました。（たしか大芳君と同年）……。

昭和三年、東本願寺革新問題（句仏師僧籍剝奪事件のために近角先生が提唱されし問題）の時、私も京都大阪に出かけ、その運動に参加いたしました。当時大字佐平治様兄弟や佐藤強三郎様も御一緒でした。

昭和三年、松山市の同信角田正雄君と共に高松市の酒見忠勢氏や長岡鶴吉氏、丸尾猪太郎氏等の御尽力を得て、近角先生を松山にお迎えして県公会堂で革新大演説会を開催し、松山高等学校のほとんどの教授をはじめ、当市の名士はほとんど一堂に集まりました。

以上長々と記しましたが、菅瀬師のお導きにより遭い難き大善知識、近角先生にあわせて頂き、聞き難きみのりを聞き、お慈悲に導かれて六十六年の老境を元気に過させていただいて居りますことを感謝して居ります。……

# あとがき

広島と長崎の原爆の悲しい記念の日、そして終戦の日と続きます八月がまいりました。然し空はいよいよ青く澄み白雲は悠々と去来しております。

七月八日、当市教育会館で明治百年の仏教学の講話に来名された旧師羽溪了諦先生を久々に御宿舎に訪ね、寸時の清談を頂きました。その節「日本の仏教学は世界にならぶものないものになっているが、その教化の面ではまことに不振である。一寸頭のよい学生は学問の方に走って布教面、伝道の仕事に立つ者は二流三流者が多い。これは憂うべき状態である……」と八十を過ぎられた老博士の長歎息をききました。これは昔から解学、行学とならべて注意されますことで、仏法が身につく人のすくないことへの頂門の一針であります。

本号の近角常音先生の御講話は、歎異抄の結文の「信心一異」の問題を中心に、著者唯円大徳のこころそのままに「信心一つなれ」との悲心の流露であります。再読参読して御真意に浴しましょう。この次の年の二月発病八月御示寂なされましたが、先生は常観先生と共に歎異抄を繰り返し説き続けて倦むことのない御生涯であられました。

福島先生を六月三日夜お迎え申して、観経の第二回目の講話を頂きました。煩悩に眼障えられた私共盲人に、釈尊は十六観法をお教え下さって真実の浄土の境界を気付かしめようとして下さった御慈悲の程を、老先生の御講話に拝聴し、ありがたく尊い御縁を頂きました。いずれ後日に慈光に発表させて頂きます。

信仰と道徳の交渉は、私共の信の旅への大きな指針であります。終戦の日まで終生を軍隊に過されました和才翁のお念仏のお味い、百八十度どころでない、天地動転に等しいこの大変動の世に処されまして、念仏一つを唯一の灯炬とされての御信味、よき枝折りとさせて頂きます。

菅瀬芳英師の法語抄は、師の記念碑の建立されましたことを機に頂きました。岡寛一郎様からはことに恩師菅瀬、近角の両先生を偲ばれての法信を頂きましたのでそのままに記載させて頂きました。

○

六月末、大垣の渡辺種彦さん来庵、共にメソポタミヤ展を見ました。短い時間、沢山の人々の中で見ただけですが私の眼を驚かしたものは、五千年も前の人々によって出来ていた美術品の数々、そこには現代の文化も遠く及ばない色彩と云い形態といい何とも云えぬものに呆然としました。然しまた、名もない草木が夫々に美しい花を咲かしている自然の事実と思いくらべて、古代とか現代とか、人間とか草木とかの差別をこえた美の永遠性と普遍性ということに心うたれました。そして「あるべきように、あれ」のカントの指示するところもほのかに知らされました。

## 御案内

◎ 毎月第一、二、三日曜。午后一時半。一道会例会。

◎ 毎月廿四日午前午后、教西寺法話会。


慈光第十九巻 第八号 昭和四十二年八月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価 半年 二百円（送共）
一年 四百円（送共）
名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人 花田正夫
電話八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所 慈光社
振替口座 名古屋一〇四七〇番